

家再建之覚

文政九丙戌之年正月十八日 喜良市村 岡田弥八郎方より養子ス

××戌年 ×齡 三拾式才

一、弟 長三 二代目

勇八 幼名 長五郎と申し 家督相続ス

妻女 を限ん 年齡 式拾三才 天明五乙巳年十月

蒔田村田中善九郎方より嫁ス

妻上京 享和二壬戌年四月八日 門出仕候

一、娘 をそよ 家督相続致ス

夫 善三郎 幼名善助と申し 年齡十八才 文化三丙寅年五月

喜良市村 岡田傳吉方より聳ス

一、妹 をさと

夫 伊太郎 年齡式拾式才 文化十二乙亥年五月十九日

当村 能登屋利八方より養子ス

同人上京 文政五壬午年四月門出仕候

右は勇八子兄弟如此

是より又跡 三代目を記ス

一、弟 長三

善三郎 幼名 善助と申し 家督相続ス

妻女 をそよ 委細は前書有之候

善三郎上京 文化八辛未丙正月二十五日門出仕候

一、姉娘 を志の 文政九丙戌年正月 十八才にして祝儀致

夫 繁吉 年齡十九才

一、妹 おだき

夫 利四郎 高根村孫四郎方より養子ス

但 家督相続不仕 別宅仕候

一、弟 善蔵

妻 別家 伊太郎 娘さよ 家督相続致ス

一、弟 ××

一、妹 安 喜作村万次郎方 呉遣し

一、弟 伊三郎

一、弟 勇作 胆振国室蘭港ニ住居仕候也

右は善三郎子兄弟如此

是より又跡四代目相記ス

四代目

一、善蔵 幼名 善蔵 家督相続致ス

妻女 をさよ 別家伊太郎方より嫁ス

善蔵上京 天保十二辛丑二月二十九日門出仕

翌年八月十七日帰宅仕 尤大坂にて壹ヶ年越年仕候

右如期御座候也

一、姉 ヲちよの 年齡五才にて病死致ス

一、弟 百太郎 家督相続致ス

一、弟 ちんこ 年齡八才 病死致候也

一、妹 をまよ 同村 神島彦次郎方嫁ス

一、弟 由吉 三之助之家督相続致ス

一、妹 いや 相内村 柏谷長太方に嫁ス

以上兄弟六人之内三人は父替り之兄弟なり、善蔵之儀は西京により、

嘉永元戌申年二月門出致ス 二十八年にて下り 此年即明治八乙亥年な

り、此年タチマチの上京仕候、然に毘沙門村澤田三五右門方より養子
三之助 致候処 をまよ 由吉 いや 三人子供有之故に別宅致候
然に百太郎母 山中由吉尊敬致候也

右善蔵兄弟如斯御座也

是より五代目跡に相記ス

五代目

一、百太郎 家督相続致ス

妻女 ヲかよ 同村 小松與吉方より嫁ス

一、兄 初太郎

一、妹 いそ

一、弟 喜三郎

一、妹 なか

六代目

一、八太郎 家督相続致候

妻 いと 但 当村 山中永吉方より嫁ス

後妻 きせ 同人 廿六年にて病死ス

同村 山中権十郎方より嫁ス

◆ 山中氏年代記について ◆

今から百六十年前、文政八乙酉年、三代善三郎なる者が、山中家の由緒を書き残したものである。現当主山中富士男氏は七代目となる。

この資料は、富士男氏の長男利幸氏（五所川原市役所勤務）から提供されたもので、山中家の記録として残っている貴重なものである。

山中家の祖先は、能登の国（現石川県能登半島）から移住してきたと語り伝えられていたが、それが記録として現われ、言い伝えがハッキリと立証された訳である。

この年代記も、煤けた厚い紙の表紙がついていたが、はじめの頁はすり切れて約二頁に亘っては空白部分があり、判読出来なかった。なるべくは原文のままにしたいと思つたが、現代の人たちに意味が通じない点もあるかと思ひ、一部にルビを振り、括弧書で解説したところもありました。この文書の解説には、吉田清作氏の手を煩わせました。

この記の冒頭にある「抑（そもそも）先祖は、能登之国正院之在、山中村と言所（ゆうところ）」とあり、現在の石川県珠洲市正院の北、東山中がその在所の場所ではないかと思われる。

金木郷土史には、〃山中の宗家は、山中百八家、山中利一家とされている。大先祖は山中山城守長俊近江六人衆の一人で、武將柴田勝家に仕え、能登国山中山城主であったが、勝家が天正十三年羽柴秀吉（豊臣秀吉）に敗れるに及び、山中一族も遂に四散、この一族のものが船路により佐渡、羽前、羽後と逃れ、天正の末期陸奥国馬の郡飯積（飯詰）に到着し農耕に従事していた。慶長元年の頃一族の内二家族は嘉瀬村に、

一族は蔵館村に移住し、うち一族は飯積に残ったという。嘉瀬山中一族の家紋は「抱き茗荷」であり、近江源氏佐々木氏流と考えられる。〃と記されているが、百八家（註・百太郎うちの八太郎が百八となったものか）に伝わる「山中氏年代記」から推定すれば、能登の国から移り住んだのは享保の頃か、と思われ、金木郷土史による天正の末期とは約百四十年のずれがあることになる。これも今後解明すべき課題である。



碇句碑への道程

沢田 一步



金木俳句会の歩み

◎昭和十八年五月 俳誌『鳴子』創刊。編集印刷（ガリ版ずり）沢田孝人（一步）。兵隊へ征く前の若い人達だけの集い。会費一ヶ月十銭。月刊発行し、昭和十九年五月号（第十三号）まで続ける。

◎昭和二十年十一月 同人月刊誌『灯』を発行。謄写印刷、編集者山中正津、沢田薫、内容は小説、随筆、誌、短歌、俳句、俳句欄、選者は沢田薫担当。

昭和二十四年一月まで続ける。月刊発行予定が、合併号などもあり、通巻第十九号で終る。その間昭和二十一年戦災で疎開中の太宰治氏と接触す。灯会員木立民五郎、山中正津、沢田薫等。

◎昭和二十五年九月 俳誌『鬼灯』発行。編集責任者沢田薫、謄写印刷山中正津、東京在湯本正美氏など会員となっている。昭和二十六年二月（第五号）で終る。

◎昭和二十六年十月 俳句月刊誌『碇』創刊。発行責任者沢田薫、謄写印刷山中正津。昭和二十八年十月（通巻第二十四号）まで続ける。三色刷りの美しい謄写印刷。俳誌『碇』の表紙は、東興年刊の俳句結社欄に掲載され、喧伝される。

◎昭和二十九年二月 沢田一步俳句中断により平井機炎、鳴海はじめの両氏により『碇』続刊。一号で終る。印刷山中正津。

◎昭和二十九年九月 『碇』と津鉄職員の俳人と合同し、俳誌名『水車』を発行。昭和二十九年十二月、三号まで出す。発行者三和満。印刷山中正津。その後は『碇』会員発行誌を持たず、各人個々に作句精進を重ねる。

重なる。

◎昭和四十年四月 俳人校長小山内末美（行実）氏金木南中学校校長に転任しきたり、五月五日行実先生の歓迎句会を沢田一耕宅で開く。この句会を期に、再刊『碇』の話まとまり、毎月一回句会を開き、会場は各俳人宅を持ち回りとなり、昭和四十八年二月号、俳人校長行実先生定年退職まで続ける。

再刊は一〇〇号までとなる。行実先生自からのガリ印刷発行は、『碇』会員、今もって感謝の念いっぱいである。

◎昭和四十八年三月 行実先生青森に去り、その後も、毎月例会句会を開き、その結果の俳誌の印刷は平井機炎、松川青雅の両氏となり、昭和五十六年八月まで、通巻は第一六三号までとなる。

◎その後 昭和五十七年四月 金木中央公民館の要望により、公民館文化活動の一端として、毎月の第三土曜日（他の行事ある場合は他の土曜日に変更）を、俳句の日とし、金木俳句会が行事を受けもって開催し、現在に至っている。

毎月一回発行の金木町中央公民館だよりの『あつまりっこ』に掲載されているとおりです。

金木俳句会各種行事の歩み

◎昭和四十一年四月二十四日 陸奥新報主催西北五俳句大会。於嘉瀬保育所

◎昭和四十四年五月五日 第一回金木観桜俳句大会。於金木町青年研修所

◎昭和四十四年十月十八日 NHKテレビ録画。津軽半島めぐり『くらしをつづる五七五』のタイトルで、芦野公園での俳句会風景を映す。参加者二十三名、十月二十五日朝七時二十分からと、昼零時五分から放映される。

◎昭和四十五年五月五日 第二回金木観桜俳句大会。於金木町青年研修所。

◎昭和四十六年五月五日 第三回金木観桜俳句大会。於金木町青年研修所

◎昭和四十七年二月吉日 金木町嘉瀬公民館新築により、それを記念し、碇吟社会員一同、短冊に句を書き、二階大広間の南側に額に入れ掲額。人員二十五名。

◎昭和四十七年五月五日 第四回金木観桜俳句大会。於金木町青年研修所。

◎昭和四十七年十一月十二日 金木南中学校校長小山内末美（行実）氏、南中を最後に退職することになり、金木俳句会一同、氏の俳句業績を惜しみ、南中学校校庭に句碑を建立す。

校舎落成
真珠の如く
稲みのる 行実

賛助者二十一名。

◎昭和四十九年十月二十日 第五回金木俳句大会。於芦野公園駅前芦野食堂。

◎昭和五十一年六月十三日 第六回金木俳句大会。於金木町中央公民館。

◎昭和五十二年六月十二日 第七回金木俳句大会。於金木町中央公民館。

◎昭和五十三年六月二十五日 第八回金木俳句大会。於金木町嘉瀬公民館。

◎昭和五十四年六月二十四日 第九回金木俳句大会。於金木町嘉瀬公民館。

◎昭和五十五年六月二十二日 第十回金木俳句大会。於金木町川倉老人福祉センター。

◎昭和五十五年十月十八日 金木俳句会砧吟社、秋谷佳村氏の句碑芦野公園内に建立。

番い蝶
茜の湖を 涉り来し

◎昭和五十六年六月二十八日 第十一回金木俳句大会。於金木町嘉瀬公民館。

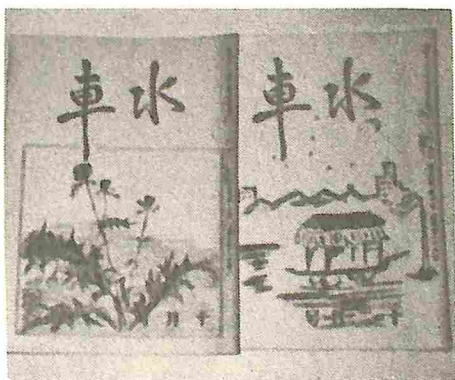
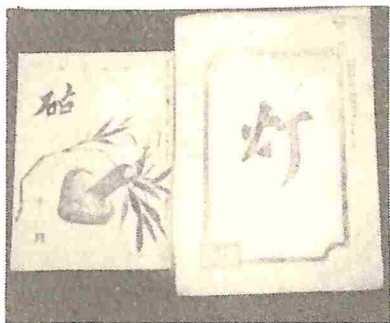
◎昭和五十七年一月六日 川倉老人福祉センター大広間に、第十回金木俳句大会の席題句『川倉地蔵尊』、囀目吟の参加者全員の秀句五十一句を掲額す。

材料は須崎まさとし氏の全面協力により、総ヒバ材の楹目にて、長さ三六四cm、巾七〇cm、各人の短冊の長さ五四cm、巾六・五cm、材質からいって永久的なものである。

◎昭和五十七年八月二十九日 第十二回金木俳句大会。於金木町芦野公園内自然休養村センター。

◎昭和五十九年十月二十八日 嘉瀬観音山に各人の句碑建立。句碑二十五基。

▼金木俳句大会は、県下俳句大会の一つの行事に入っており、金木町文化事業の一端として、金木町、金木町教育委員会の後援、援助を受けております。▲



① 一葉を

くるむ虫あり 草紅葉

雅号及(本名) 季岳(原田兼治)
住所及職業

津軽鉄道職員



俳歴 昭和四十年 津鉄機関誌三和堂村主幹
俳誌の『水車』吟社に入会。昭和四十五年二月『砧』吟社俳句会にも参加し、現在両吟社に所属、句作している。

② 夏祭り

摺り足そろう奴踊

雅号及(本名) 雑人(坂田輝孝)
住所及職業

津軽鉄道職員金木駅長



俳歴 津鉄俳句会『水車』入会。昭和四十五年五月金木俳句会『砧』吟社入会、現在に至る。

④ 秋夕日もじせいかくに

ひをまもる

雅号及(本名) 巽風(阿部定一)
住所

金木郵便局局長代理で退職後悠々自適。



俳歴 昭和二十二年頃山中千法氏にすすめられ、同人誌『灯』に入会。昭和二十六年引続き『砧』吟社へ入会。昭和四十八年〜五十年転職により一時中断。昭和五十一年金木俳句会『砧』吟社に入会。昭和五十九年十月北海道の俳誌『青女』に入会、現在に至る。

③ どしゃぶりの

ままだに暮れゆく落葉かな

雅号及(本名) 石人(土岐繁一)

俳歴 馬耕はなやかな頃、蹄鉄を業とし、のち初代の嘉瀬農業協同組合長も務める。三十代俳誌『柳瀬』など作り、山中天小入らと嘉瀬俳句の創始者であり、後輩の指導にあたった。

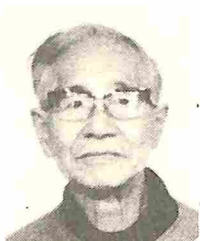


⑤ 松籟や

並びて在す 観音像

雅号及(本名) 白泉(伊藤久雄)
住所

昭和四十二年金木小学校長で退職後昭和四十六年より金木町教育長一期務める。



俳歴 昭和五十五年十月より、金木俳句会『砧』吟社に入会し現在に至る。

⑥ 喜良市と

金木一望稲穂波

雅号及(本名) 〓もとや(高橋元弥)

住所及職業 〓

商業、金木高元呉服店々主。元金木町教育長。



俳歴 〓昭和五十八年三月、金木公民館文化活動の一貫として、金木俳句会に参加し、現在に至っている。

⑧ 青田海

縞たてて風泳ぎゆく

雅号及(本名) 〓一步(沢田 薫)

住所 〓

昭和五十八年十二月嘉瀬農協参事で退職後悠々自適。

俳歴 〓昭和十七年より作句、昭和十八年五月俳誌『鳴子』を創刊。



昭和二十八年十月まで俳誌『砧』を発行し続ける。その後、俳句校長小山内行実先生着任まで作句を断念し、それ以後は句作し続け現在に至る。

⑦ 短日や

常に様み合う河口波

雅号及(本名) 〓はじめ(鳴海 一)

俳歴 〓昭和二十六年十一月、沢田一步宅の句会に初参加で、火鉢の句が最高点をとり、それから俳句の『とりこ』となる。忙しいリング園経営の中で、片ときも俳句手帳を離さず、県下の俳句大会では常時上位入賞を果し、良句佳句を残した。



⑨ 津軽野を

見おろす春の桃地藏

雅号及(本名) 〓艸骨(長内誠治)

住所及職業 〓

洋品店経営



俳歴 〓昭和二十一年より俳句に関わる。俳誌『万緑』会員。青森俳句会『暖鳥』同人。五所川原俳句会、金木俳句会に所属す。昭和六十年一月『万緑』に『十三瀉行』三千句が第十三回万緑特別作品の特選第一席となり、金木に艸骨ありの名声を高める。

⑩ 焼網の

焦げ目も味の初秋魚

雅号及(本名) 〓まさとし(須崎正敏)

住所及職業 〓

昭和五

十九年十二月長年務めた金木営林署を退職、現在農業を営む。

俳歴 〓昭和十八年五月沢田一步俳誌『鳴子』創刊とともに参加、



東条竹秋氏俳誌『茜』、同人誌『灯』、俳誌『鬼灯』、俳誌『砧』と絶えず一步氏と行動をともにし、現在の金木俳句会『砧』まで続いている。

⑫ 熊笹の

奥に幸あり山の秋

雅号及(本名) 〓機炎(平井 清)

住所及職業 〓

自営ガス販売業

俳歴 〓昭和十八年五月一步氏に進められ句作に入る。『鳴子』創刊。



昭和二十六年十日創刊の『砧』に参加。以来現在まで続く。昭和四十三年三月安住敦の『春燈』会員。昭和四十五年四月角川源義の『河』会員。昭和四十八年十二月高松玉麗の『寂光』会員のち同人となる。現在金木俳句会砧吟社主幹。

⑪ 老鶯や

どの径行くも観音山

雅号及(本名) 〓梵貝(山中芳市)

俳歴 〓昭和初期木村九折主宰『山葵』時代から句作。昭和二十七年二月の『砧』吟社主催。昭和四十一年俳句校長行実先生着



任から特に熱心になり、各種県下俳句大会に入賞。中村草田男主宰『万緑』にも加入し悔いのない俳句人生であった。

⑬ 藁燃えて

津軽野の秋昏れ急ぐ

雅号及(本名) 〓篁村(三和 満)

住所及職業 〓

津軽鉄道株式会社社長。



俳歴 〓昭和十三年春、津鉄俳句『水車』吟社に入会。現在同吟社を主宰している。嘉瀬駅長時代の昭和二十九年九月頃、『砧』と『水車』が一時合流したことが、忘れない思い出となっている。

⑭ 花ぐもり

熱のこる児のつめを切る

雅号及(本名) 善美枝(水上喜美枝)
住所及職業 〃

金木病院勤務 看護婦長

俳歴 昭和四十一年一月より『砧』俳句会に入会し、昭和四十七年まで続ける。その後短歌を作り、金木短歌会の指導を受ける。



⑮ 菊のかおり

心のかおり

豊かなり

雅号及(本名) 天小人(山中 忍)

俳歴 古くから嘉瀬明誓庵々主を務め、俳句を好み、自ら俳誌『河骨』『土筆』等を発刊し、嘉瀬俳句の草分けであった。現在の金木俳句会砧吟社の基礎を築いた。



⑯ 観音堂郷は

夕霧薄墨絵

雅号及(本名) 山灯子(泉谷幸視)

俳歴 昭和十九年三月俳誌『鳴子』第十一号より終刊十三号まで参加、戦争敗戦時中断。昭和五十八年約四十年ぶりで公民館での金木俳句会へ加入。袖の句作に熱心で、惜しむらくは、「きぬたの小道」句碑除幕式の五十九年十月二十八日の句碑を見ることがなく急逝した。



⑰ 石仏に

触れつはななれつ夏の蝶

雅号及(本名) 青炎(小野久五郎)

住所及職業 〃

金木町田村金物店勤務

俳歴 昭和四十年五月金木俳句会砧吟社入会。旭川『青女』に入会。現在に至っている。



⑱ 鳩翔びて

日の出の夏を切り開く

雅号及(本名) 秋月(小倉秀高)

俳歴 昭和二十五年九月『鬼灯』創刊より俳句会に参加。昭和四十七年嘉瀬から五所川原松島団地に居を移してから『灯』『砧』誌に参加。昭和四十七年頃より病気がちとなるも、東奥日報夕刊の『世相川柳』に力作を発表していた。



⑳ 山の子に

山の明るさ梅咲けり

雅号及(本名) 青雅(松川秀満)

住所及職業 〃

五所川原市元町

青森経営事務総合センター所長

俳歴 昭和四十年金木俳句会『砧』吟社に入会。昭和五十二年五所川原市へ移住、五所川原俳句会にも入会。その間中央誌『万緑』にも投句し、現在に至る。



㉑ 金屏風倒したる

如稲の秋

雅号及(本名) 竹灯(斉藤義雄)

住所及職業 〃

商業(斉藤電気商会店主)

俳歴 昭和四十一年七月俳名行実南中学校長着任し、再刊した『砧』第十七号より入会。沢田一步宅での句会が初参加であった。



㉒ 花は花

詩は詩なり秋のいろ

雅号及び(本名) さつき(白川須美子)

住所及職業 〃

茶道(表千家) 華道(池坊) 師匠

俳歴 昭和四十年十一月長内艸骨さんにすめられて『砧』俳句会に仲間入り、昭和四十六年父の追悼句会以来、句から遠ざかっている。



② 斧打てば
そこより朝霧湧く如し
雅号及(本名) 節村(齊藤弘微)
住所 〃



金木管林署を退職後悠々自適。

俳歴 〃 昭和十九年三月南方軍属より帰り『鳴子』の句会に初参加。その後戦後同人誌『灯』の俳句壇に投稿、『砧』発刊により会員となり、現在に至っている。

④ 陽炎に
盗まれそうな児の眠り
雅号及(本名) 一耕(沢田政孝)
住所及職業 〃



農業(金木町々議会議員)。

俳歴 〃 昭和十八年五月沢田一步主幹の俳誌『鳴子』創刊以来、昭和二十一年同人誌『灯』、昭和二十五年九月俳誌『鬼灯』、昭和二十六年十月俳誌『砧』と一貫して嘉瀬俳句会の一員として歩み続け、現在に至る。

③ 名月や
笑み丸き吾子三人かな



雅号及(本名) 〃 昭人(小山内繁四郎)

俳歴 〃 十代頃から俳句を嗜み、石人、天小人等の指導を受け、昭和四十五年まで俳句を続けたが、その後は東奥日報夕刊の世相川柳のレギュラーとして逝去するまで活躍し続けた。

⑤ 水芭蕉映来る
霧に青ざめし



雅号及(本名) 〃 千子(田村雄三)

住所及職業 〃

武田中学校長で退職後、現在金木町教育長

俳歴 〃 退職後昭和四十七年金木俳句会『砧』吟社に入会。昭和四十八年北海道俳誌『青女』に入会。東奥日報俳句にも投稿している。

藪 覗み余聞

町内名の語源と由来の考察

秋 元 惣 之 進

嘉瀬には二六の町内があるが古来から伝承されて来た若干の町内名の語源の由来を探りたいと思う。
地名や町内名の語源は唯、たんに名付けられたものではなく、土地柄に結び付いた言語、民俗、地理、信仰、土地の歴史や往時の人々の姿と心が其の中に含まれて今に伝えられている。

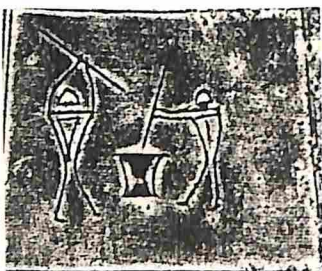
伝承されてきた地名や町内名の語源は、旧街道や伝説、伝統、社寺などに由来する多くのものは消え去ろうとし、其の由来を知る古老達も、いつか数少なくなっている。

「古きを尋ねて新しきを知る」地中に埋れた貝殻の化石や土器と同様に、町内名は歴史を感じ郷愁を覚えるが形の無い文化財であると思う。そこで往時からの嘉瀬の町内名の語源と由来を考察して見たいと思う。

古 町

嘉瀬は中山山脈から西に裾を引く小高く広い平坦地であるが嘉瀬草分けの住地ともいうべき古町や狐崎は、今から約八

〇〇年以前の元暦時代に(二一八四)中央



権力から追われた京都や大阪の都人が北上し、十三瀨から内陸に入り古町や狐崎を隠れ里として住み着いたと言うが、嘉瀬近辺の田圃は往昔に

は、十三瀨に連なる広大な瀨であり丘陵平坦地は林立繁茂する雑木森で擰猛的な動物に悩まされながらも先住民は生きる為血と汗で開拓し、又、瀨辺で魚介類を捕り山野を駆け回りながら猟を狩り生活を支えて来たが、土地も開拓され、古町近辺は人影の往来が次第に激しくなり嘉瀬も集落が構成されて来たと言うが、文献に依ると六四三年前の康永二年(一三四二)安部貞季の作図に嘉瀬城が築城されておるが、築城以前に古町は嘉瀬古来からの草分けとして先住民が集落形成されておったと言う。

又、四代藩主、信政が津軽新田開発に着手した頃に藩士、鳴海伝右エ門が嘉瀬に派遣され新田開発に従事した頃の住いは古町(現、戸主、鳴

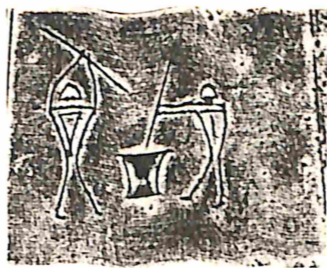
海勲氏) だったと言うが、中村正敏家(古町)も相当古く、藩制時代には殿様(藩主)が新田開発検視のときの、宿泊の際には中村家が御陣屋で、邸宅の周囲には厳重な塀と壕が掘ってあったと言う。

昭和十三年頃迄は中村家にあった鎧、兜、槍、刀、肩衣(カミシモ)コギンなどがあって私共が高等小学の学芸会には、藩政時の武家装具一式を借りに行ったものであるが廃藩置県後の中村家は「造り酒屋」で主として北海道、秋田方面が販売先だったとも伝えられておる。

明治二年(一八八八)町村制が公布され集落内にも行政上、町内名が命名される事になり古町では往時からの嘉瀬草分けの先住民を何時迄も忘れる事が無い様に後世に残そうと「古」きを取り、古町と名付けたという。

鍛冶町

昭和七、八年頃、嘉瀬溜池(清久)南岸と長富溜池(二の沢)北岸に鉄屑の塊



りが散在して居た。沢山の鉄屑の残滓が何故に両岸辺に捨てられてあるのか疑念

を懐き古老に尋ねて見たが、それを解明することが出来なかったが、伝承に依ると(現在でも鉄滓の塊りが散在している)、津軽藩では今から約三七五年前の慶長十五年(一六一〇)に始めて領内で鉄を造ったと伝えられているが、其の場所は東郡蟹田川上流と北郡今泉の二ヶ所だったと言うが次第に両製鉄場が廃れ、何時の間にか消えたと言う。其れから

三年後の三七八年の慶長十八年(一六一三)蟹田川上流で製鉄をしておった弟子の館部呂磨という鉄工人大陸式製鉄法を研究しながら狐崎に来て製鉄を始めたが、規模や製錬方法は定かでない。

当時は(慶長年代)嘉瀬、長富の両溜池も無かった時代だったが、嘉瀬溜池の中を今でも流れておる下堰は往時には川中も大きく流れも早い川で山水が満々と流れ、十三瀨に続く流れで舟が往来していたと言う。

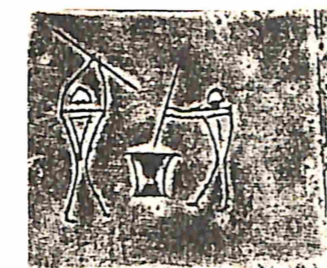
其の昔、狐崎は隠れ里として中柏木の下の切り街道より分岐道として結ばれてあったから製鉄を造る場としては地理的に外から視られず好適場所であり、弟子の館部呂磨は狐崎を選定した事と思う。

鉄の原料となる砂鉄は七里長浜から採集し、十三瀨から岩木川を逆上り下堰を通り狐崎の舟場に揚げ、砂鉄や資材の積下し場にしよう。燃料は狐崎付近に林立繁茂した林木を薪材として利用し鉄屑の残滓は溜池の両岸辺に捨てるという好条件が整っており最適の場所だったと思う。

又、慶長年代の嘉瀬の人家は知るすべも無いが、当時の嘉瀬の人々は鉄の出来るのを見た事も聞いた事も無く、狐崎の製鉄の場を鍛冶屋と呼んだと言うが、往昔に狐崎で捨てた鉄屑の残滓が今に残っていることから想像しても鍛冶町は故、無き町名でないと思う。

往昔には散在的だった嘉瀬の人家も次第に増え始め、明治に入り町村制が公布され嘉瀬の集落も、嘉瀬、毘沙門、長富、中野新田、中崎、小栗崎、中柏木の七つの集落が明治二年(約九七年前一八八八)に合併し、村に制定昇格されたが集落内には、町内名が無かったので鍛冶町では往時に狐崎にあった製鉄場を、往時の人々は鍛冶屋と呼んだので鍛冶屋(製鉄場)を何時迄も偲ぼうと鍛冶町に命名したと言う。

車町



藩制時代には稲の脱穀は千歯扱きだったから「ニラ(方言語) 作業場」に臼を据え稲束を擱んで稲穂を落としたが、当時は「エガ稲 有芒稲」で千歯扱きから脱粒させた後で残粒を靱押棒で叩いて再び脱粒させ、四角な「靱落し」へ入れて振り、靱を落とし藁屑と靱を分離させたが唐箕が無かった前には箕で「いちいち」煽ったと言う。

この靱を「手木」の着いた「スリ臼」で換えたり押ししたりして回し、靱と糠を分離させて玄米を磨く。こうして玄米にしてから米搗きをして精米をするが脱穀から精白迄の作業は全部、人手であったから寸分の暇も無く若い人でも裸になり汗を流して頑張ったと言う。

藩制時の嘉瀬の人々は他の集落とも交流が無く「井の中の蛙」的な存在だったが、大工だけは仕事の都合で遠く他国迄出掛けて仕事をしたので暇を見ては他国の珍らしい物を見聞し、身近な物には他国の手車や米搗き「水車」などを見て回った。

昔の小田川の水は喜良市から嘉瀬の冷コ水、車町へ流れていたと言うが、当時の嘉瀬の大工の棟梁、木下与左エ門は村人の昼夜の休み無く米を搗く姿を見て「上方」で見て来た「米搗き水車」を作り、今の車町の大堰に水車小屋を建て、満水の流れを利用し、水車で米を搗いたと言う。

前町



嘉瀬の明光庵は現在の庵主、木村清海氏で二一代に亘ると言う。

庵内には立派な梵鐘(又は教鐘とも言う)が吊され縦五〇センチ、直径三五センチ

の梵鐘の内側には嘉瀬、小栗崎、両村中寄附、施主、鳴海善七、善九郎、外五名の尊名が刻まれ、治工、弘前、坂本久右エ門後彦、文政六癸(一六二二年前一八二三)と記されておる。

又、当庵、拾四世と記される。お曼陀羅や十七世と記される連銭代があるが、明光庵は今から三三〇年前の明暦一年(一六五五)の草創と伝えられるが、往時には、人間が没し土葬しても付近から小石を拾い、土